



著者プロフィール

鈴木鷹夫（すずき・たかお）

昭和3年9月13日 東京浅草に生れ日本橋浜町に育つ

昭和29年11月 石田波郷に師事、「鶴」入会

昭和37年1月 「鶴」同人

昭和46年10月 石田波郷没後能村登四郎に師事、「沖」入会
翌年同人

昭和62年1月 「門」を創刊し主宰

平成14年12月 「沖」同人を辞す

句 集 『渚通り』『大津絵』『春の門』『風の祭』

散文集 『片言自在 俳句この頃』

小 説 『風騷の人 若き日の宝井其角』

編 著 『秀句350選 遊』

他 に 現代俳句文庫『鈴木鷹夫集』その他

現 在 俳誌「門」主宰、俳人協会評議員、日本文藝家協会・
日本ペンクラブ各会員、国際俳句交流協会評議員、
日本現代詩歌文学館振興会会員

〈句集『千年』より転載〉〈2004年4月27日時点〉

『千年』（自選十五句）

鈴木 鷹夫

起つときの脚の段取り孕鹿
夕櫻やがて夜汽車となる窓に
石鹼玉ひと吹十三七つほど
千年杉の千年前の夏の雨
血の味を少年が言ふ麦の秋
今生は手足を我慢かたつむり
あをあをと津軽が匂ふ茅の輪かな
扇もて木曾三川を煽ぐかな
火祭へ行く黒髪とすれちがふ
秋茄子にこみあげる紺ありにけり
水中をさらに落ちゆく木の実かな
吊されし鯨鯨何か着せてやれ
凍鶴の影伸びてをり檻の外
春待つは妻の帰宅を待つごとし
わが前の柳眉怖ろし歌留多取